



「早稲田大学卒業後、大学院留学のために渡米。サザンメソジスト大学で修士号と博士号を取得。スミソニアン自然史博物館で博士研究員を経て、現在は国立科学博物館で研究に従事」

もし私が今、高校生で、目の前にこんな経歴を持つ人が現れたなら、ドキドキしすぎてうまくしゃべれないのではないかと思う。

まさかその人が、「私はね、あなた自身なんですよ」なんて言うのならば、漫画も顔負けの仰天顔（あきあきげん）ができる自信がある。開いた口がふさがらない。

ちよつと待つて。

ちよつと待つて。

大きく息を吸って、少し落ち着いたら、

あのこと、聞いてみたい。

「わたし、恐竜博士になれた？」

おつちよこちよいで、要領悪（ようりょうあく）くて、泣き虫で、失敗ばかり。決して向いているとは思わない。でも研究が大好きだ。

これは、青春の全てを恐竜と古生物（こぶつ）に捧げ、同級生たちに遅れて10年後にようやく仕事にありつけた古生物学者の、もがいて、もがいて、進んだ道のはなし。



# 古生物学者になりました

私は古生物学者。東京は上野にある国立科学博物館（以下、科博）が私の勤め先で、小さな哺乳類の化石を研究している。とは言っても、科博の研究施設は上野から1時間ちよつとの茨城県つくば市にあり、主な勤務地はここ。

まずは、私のお気に入りである研究施設の屋上から紹介したい。

目の前にどーんとそびえるのは日本百名山のひとつ、筑波山だ。つくば市は関東の平野部にあり、田んぼが広がる平たい地形。そこにドシツと構える筑波山は、

百名山のなかでイチバン標高が低いといえど、雄大である。

標高が低くてもイチバンならいいね。ビリのイチバンなんだもん。

「西の富士、東の筑波」といわれるように、筑波山は関東平野部に暮らす人にとっては昔から心の拠り所であったようで、私が好きな百人一首の句「筑波嶺の峰より落つる 男女川 恋ぞつもりて 淵となりぬる」はここで詠まれている。この絶景をひとり占めできる科博の筑波研究施設の屋上は、すごく贅沢な場所だと思う。

ん？ なにか臭ってきた。

そうそう、言い忘れてしまったのだが、ここには実験ドラフトの排気口があるので、「研究施設らしい」臭いがすることがある。

それでは、そろそろここを離れて、私の研究室にお連れしよう。

ドアを開けて右手の壁は天井まで続く本棚で、私のジブン図書館だ。



左手には、もう少し幅広い天板のシングル棚があり、研究で使う消耗品を置いている。棚にはまだ余裕があるので、物が増えなくてもしばらくは困らないだろう。真ん中にはテーブル。ここで標本の登録作業をする。足元に「転がっている」化石は登録途中の大事な標本なので注意して歩いてほしい。奥の棚はハンマー、タガネ、長靴、リュックなどの野外調査用具（フィールドグッズ）を置く場所。最近、これから長く使うことを考えてちよつといいグッズを揃えたから、ここを見るとニンマリだ。そしてその奥に私の机。背を向けるように顕微鏡を配置している。



標本を観察している時間が最高に幸せ。飲食しながら標本を触らないことをルールにしているので、大好きなコーヒーは終わったあとのお楽しみにしよう。顕微鏡で堆積物を注意深く見詰め、ピンセットではじきながら、砂粒か化石かを判断していく。数時間ほど作業をしていると、哺乳類の歯の化石が見つかった。小さな化石だけど、複雑な形をしていて、本当にかっこいい。この歯化石の持ち主について調べることが、私の研究のひとつである。

博物館の研究員としての私の主な仕事は、標本の管理（化石の標本化、データベース作成作業、研究や展示のための貸出など）、展示、教育普及関連、そして研究活動である。博物館の展示室でトークをしていない時は研究ばかりしていると思われがちなのだが、研究以外の仕事も実は多い。研究ができるのは、週5日間の勤務時間のうち、平均してほしい1日くらいだろうか。

朝出勤すると、受信トレイにはすでにたくさんのメールが届いている。苦手な事務書類についてだとか、研究者との議論、来館者とのスケジュール調整、展示

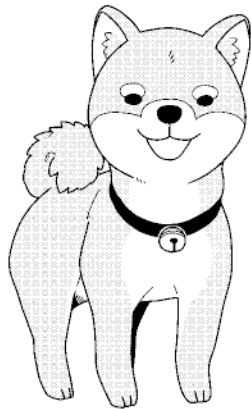
の監修、校閲、お客さんの質問などなど。お昼すぎまでに、メールチェックとそこから派生する仕事が終われば、御の字。お昼すぎて、17時に終業時刻のチャイムが鳴るまでは、標本整理、実験、分析、飼育しているネズミたちのお世話。そこから19時までには、研究動向をチェックしたり、論文査読や学会業務、そしてまたメールをチェックする。時差の関係で、夜になると英語のメールが増える。ここで働き始めてからあつという間に5年の月日が流れ、忙しさにもようやく慣れてきた。

さて、今日は少し時間があるので、恐竜博士になりたかった私が哺乳類の古生物学者になるまでの道のりを少しお話ししよう。

そうそう、私のところで働いてくれている敏腕助手さんたちもこのストーリーに副音声として参加してくれるようだ。キヤツキヤツと、はしゃいでいる二人の姿が想像できる。



はじめまして、ヤギシタです。新発見のお手伝いをするのが面白くて研究補助のパートをしています。難しいことはわからないけど、科博での毎日が大好きです。



はじめまして！ 木村先生の研究室でアルバイトをしているスズキです。大学院で古生物を研究していて、先生のところでは化石標本の登録と研究補助をしています。

校閲  
文章に、事実関係の誤りや不備がないかを確認すること。

査読  
学術誌に投稿された論文を同分野の専門家が評価・検証すること。論文が掲載される前に行なわれる。

# 第1章

## きょうりゆうはかせになりたい

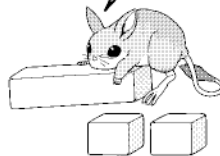


### 1 きょうりゆうだいすき

恐竜が好きだ。

いつから好きだったかは覚えていない。気づいた時には好きだった。ただ、ずっと記憶しているイベントがひとつある。1990年に幕張で開催された「大恐竜博'90」である。

小・中学生時代



私は父の転勤に合わせて、小学1年生の時に神奈川県川崎市に移り住んだ。東京デイズニールンドがオープンして7年目。デイズニールンドならもう行ったよ、というのが、東京圏に住む子供たちのステータスになっていた時代だ。だから、「せっかくこつちに引越して来たんだから、デイズニールンドに行ってみようか」と言った母の言葉は、幼い私をとて喜ばせた。そして、デイズニールンドがある舞浜までの2時間ほどの電車の旅の途中で、幕張で大恐竜博が開催されていることを知った。

その日の予定を変更したのか日を改めたのかはどうしても思い出せないのだが、このようにして、デイズニールンドでは将来研究の対象となるネズミ亜科の人気キャラクターに出会い、大恐竜博にも足を踏み入れるチャンスを得たのである。



大恐竜博'90の思い出写真。一生の宝物にすると決めたスタンプブックは今でも大事な宝物。

この大恐竜博は、1990年の夏に千葉県幕張メッセで開催された展覧会で、「カナダ・アルバータ発、恐竜の奇跡。」と銘打たれたサブタイトルがついていた。恐竜化石産地として知られるアルバータ州ドラムヘラーにはロイヤル・ティレル古生物学博物館があり、この化石がたくさんやってきているという。なかでも目玉はティラノサウルス。大迫力の全身骨格のほかに、実物大模型も来日した。

大きな会場には、恐竜化石をひと目見ようとたくさんの人が押しかけていた。そしていよいよ入場するところで、チャック付きの袋に入れられた小さな石のかけらをもらった。それはものすごく古い時代の化石で、確か1億年前のものであったと思う。ドラムヘラーは中生代白亜紀後期の地層が広がるところなので、もしかするともう少し新しい時代のものであったかもしれないが、ここでは幼い記憶のままでもいい。

開いた手のひらの上に、石のかけらを載せてみた。そしてしばらく眺めていると、今までに体験したことのない不思議な感覚に包まれるのを感じた。

#### 白亜紀

中生代は古生代に続く地質時代区分で、白亜紀はその3つある区分の最後の時代。白亜紀後期は約1億年前〜約6600万年前。

「時が、止まっている」

1億年も前に時を止めた、かつての生物の痕跡。そして、うすい皮膚を介したその下では、今を生きる私の血液が絶え間なく流れている。

まるで時間を旅しているような気持ちになった。

この不思議さこそが私の原点で、「数億年の時間の旅」から戻って来る頃には、恐竜のことがもつと好きになっていた。

この石のかけらは残念ながら失くしてしまっただが、スタンプラリーのミニブックは今でも大切に持っている。





## 2 ジュラシック・パーク

さて、大恐竜博ではもうひとつ印象的だったものがあつた。ティラノサウルス化石のクリーニングブースだ。防塵マスクと防音ヘッドセットを着けて、エアースクライバーを手に母岩から化石を取り出していく様子がとてもかっこよく、自分もやってみたいなと思つた。

本やイベントのなかの世界だと思つていた古生物学者や古生物を取り巻く職業が本場に存在するお仕事であると知つたのは、1993年に公開された映画『ジュラシック・パーク』を観てからだ。私は小学5年生になつていた。

今もシリーズが続く超人気映画なので、あまり恐竜に縁がなかつた人でも、あの壮大なテーマ曲くらいは聞いたことがあると思う。この映画には数々の恐竜が登場するが、なかでも高い知能を駆使し群れで効率的に狩りをするヴェロキラプトルの姿は、これまでになかつた俊敏な小型獣脚類という恐竜像を広く一般に

母岩  
化石などの鉱物を含む岩石。

映画  
『ジュラシック・パーク』  
アメリカの小説家、マイケル・クライトンが1990年に発表した同名のSF小説が原作。ステイヴン・スピルバーグによって映画化され、以降シリーズ化された。

普及させた。最新恐竜学の要素に、化石種のゲノム編集という近未来の遺伝子工学が盛り込まれたこの映画はそれほどのインパクトがあつたし、恐竜大好き少年少女たちの恐竜談義の中心であつた。

特に私の興味を強く引いたのは2つのシーンだ。ひとつはティラノサウルスがヒトを丸呑みにしてしまうシーン。ものすごく怖くて、映画館から帰つたその日は電気をつけっぱなしにして寝た。

そしてもうひとつは、病気になるたトリケラトプスの病状を知るために女性古生物学者がトリケラトプスのウンチの中に手を入れるシーンである。ブラシで地層表面をきれいにしながら慎重に化石を掘り出していくシーンも印象的であるが、絶滅した動物を今現在生きている動物のような目線で研究する古生物学者の姿、そして何よりも女性でもこういう研究をすることができるということに、強く心が揺さぶられた。

いつか、こんな仕事をしてみたい。

恐竜への秘めた想いが、私のなかで膨らんでいった。